

街道の風景と旅情を鑑賞する

「江戸長崎道中図」

(草津市蔵・うばがもちやコレクション)

「江戸長崎道中図」は、江戸から長崎までの東海道を通る旅路の風景を描いた絵地図です。全体は2巻の絵巻からなり、一卷は江戸（現、東京都）から京（現、京都府）まで、二巻は大坂から長崎までを描いた長大な作品となっており、江戸から明石あたりまでの陸路、大坂から長崎までの海路・陸路で描かれました。絵巻には日本の船の他、長崎の外海には帆柱を立てたヨーロッパの帆船が描かれています。

琵琶湖を描いた部分では、中ほどには瀬田橋が描かれ、その向こうには膳所(ぜぜ)城、手前をたどれば、東海道の並木道が右へと続いて草津宿へ。さらに湖岸への道をたどれば矢橋港へと、思いの外、忠実な描写です。

この他にも、草津から東へは東海道とともに、中山道垂井(たるい)宿を経由して東海道宮(みや)宿に至る、峠や渡しの難所を避けた街道ルートである、美濃路(みのじ)も描かれ、重要な道を表す地図としての心遣いも感じられます。

江戸中期以降、旅人の持ち歩いた道中絵図が実用的なものであったのに対し、このような絵地図は主に鑑賞用として描かれました。城や寺社、橋など街道の様相なども美しく描写され、見どころを描いています。また、どこかほのぼのとした道をたどる人々の姿には旅への憧れも表現されているようです。

(令和8年9月・草津宿街道交流館 吉崎 早苗)



▲二巻(部分)長崎から



▲一卷(部分)草津から